



神奈川歯科大学の創立者 木本鎮雄先生



私が幼ないころ、年賀の客が吉祥寺の自宅にみえた。毎年、決まった顔ぶれだったが、そのうち御一人だけ、私と妹たちになにこやかに御年玉をくださった。私たちは「木本せんせい」とよんで、その御年玉を楽しみにしていた。少し恐い顔をした優しい“木本せんせい”が、日本歯科大学の偉い人とは知らなかった。

木本鎮雄（しずお）は、昭和8年に早稲田高等工学校を卒業し、中原 實 理事長に引きたてられて、昭和21年4月、38歳のとき、財務管理を買われて本学調度営繕課長に採用された。抜きんでた馬力と胆力をもった彼は、アレヨアレヨという間に7年後には法人理事に抜擢され、そのあと34年には事務局長の重責についたと、のちに知った。校友会特別会員でもあったが、陰で彼の力量を妬み、出自を揶揄する向きも少なくなかったという。

私が日本歯科大学に入学した年、同級生数人が悪戯に2階の出窓にでて騒いでいた。即刻、事務局長室へ呼びだされた。私は、同級生に乞われて付き添った。室の中から、鬼のような形相で烈火のごとく叱声が飛んできた。廊下にいた私は縮みあがって、木本先生はこの大学で2番目にエライ人なんだ、と覚った。

それから2年後、昭和36年7月に木本事務局長は、都内の大岡山にある日本女子衛生短期大学を経

営する学校法人日本厚生学園の理事長に就任した。同校は、堀 武（本学15回卒）が理事長・学長をつとめていたが、大学経営に長けた木本に経営を委ねたのだ。

木本は、この学園を足がかりにして、勇躍、歯科大学の新設を企図した。中原 實 は当初戒めたが、彼の意志は揺るがず、陰日なたに助力することになる。木本は私財を投じて、横須賀市稲岡町に用地を買収し、辣腕をふるって昭和38年8月に同地へ移転する。

その9月には、学園名を学校法人神奈川歯科大学に改め、中原 實 を理事長として、神奈川歯科大学設置認可を文部省に申請した。理事長を中原 實 にしなければ、認可はおぼつかなかったのだ。

木本の起意から2年足らず、翌39年4月に神奈川歯科大学は、9番目の歯科大学（私立では7番目）として開校した。学長は、元東京医科歯科大学歯学部部長で、当時、本学歯学会会長をつとめる檜垣麟三、附属病院長は堀 武であった。同年9月に木本は、18年間つとめた本学を辞し横須賀に専従する。

そのあと、もっとも険しい創立の10年間、理事長代行の木本は、実質上の理事長として創立時の大学運営に粉骨砕身する。最初の卒業生を送りだした翌年の昭和46年10月に、宿願の理事長に就いた。

それから3ヶ月後、鉤（かんな）で削られるような心労が祟り、翌47年正月明けに飯田橋の東京警察病院に入院、1月10日に急逝した。享年64歳。悲運にも、彼が理事長の座にあったのは、わずか3ヶ月余りであった。

図らずも中原は初代理事長となったが、あくまで神奈川歯科大学の木本の支援者であった。二代目理事長に甘んじたとはいえ、紛れもなく神奈川歯科大学の創立者は、木本鎮雄であることは言を俟（ま）たない。

木本先生が亡くなられたのは、奇しくも本学新潟歯学部の開設直前で、私は新潟で開校準備に忙殺されていたので、木本理事長の訃報を知ることはなかった。

(写真・昭和36年頃の木本事務局長)